

# 福岡県大牟田市に関する NHK 放送番組の分析

小田 美季

## Analysis of NHK Documentaries about the Omuta City in the Fukuoka Prefecture

Miki Oda

**Abstract:** The Miike coal mine was once the largest coal mine in Japan, and it was located in the area extending from Omuta in the Fukuoka Prefecture to Arao in the Kumamoto Prefecture. The coal mine was closed down in March 1997. However, the histories of the Miike coal mine and Omuta are inseparable. On 1 March 2017 Omuta celebrated its 100th anniversary as a city. As of 1 September 2017, Omuta's population stood at 116,971, and the ageing rate was 35.3%. Omuta is attracting nationwide attention once again, which is a result of the efforts undertaken in the community to support people diagnosed with dementia. From 2005, the efforts to support these people were broadcast by the NHK (Japan Broadcasting Corporation), which contributed to the city's popularity. In this paper, I seek to analyse the intersections between the histories of Omuta and the Miike coal mine by examining the NHK archives and its television documentary. I also mentioned the significance of the TV documentary in this context.

**Key Words:** Omuta, former coal production area, ageing, network

**抄録:** 福岡県大牟田市から熊本県荒尾市にかかる地域には、かつて三池炭鉱があった。三池炭鉱は、国内産業の近代化や戦後の復興にエネルギー供給の担い手として大きな役割を果たしたが、1997年3月に閉山した。旧産炭地である大牟田市は、2017年3月1日には市制100周年を迎え、2017年9月1日現在、人口116,971人、高齢化率35.3%である。三池炭鉱の所在地として表舞台にいた大牟田市が閉山後再び全国的に取り上げられるのは、2005年以降である。そのきっかけのひとつに、大牟田での認知症のある人を支える地域の取組みに関するNHK放送があった。これらに基づき、本稿では、大牟田の地域研究の一環として、大牟田市と三池炭鉱に関するNHK放送番組の分析を通じて、大牟田市の歩みと三池炭鉱の歴史の交わりを踏まえた地域の可能性について考察した。また、地域の表象への公共放送の影響についても言及した。

**キーワード:** 大牟田、旧産炭地、高齢化、ネットワーク

## はじめに

福岡県大牟田市は2017（平成29）年3月1日に市制100周年を迎えた。2017（平成29）年9月1日現在、人口は約116,971人、高齢化率は35.3%である（大牟田市2017a）。この大牟田市と熊本県荒尾市にかかる地域に、かつて国内最大の炭鉱、三池炭鉱があった。

三池炭鉱は、国内産業の近代化や戦後復興にエネルギー供給の担い手として大きな役割を果たした。また、そこには多くの労働者が集まった。しかし、エネルギー革命が進む中、1960（昭和35）年には戦後最大の労働争議、三池争議が、そして、1963（昭和38）年には死者458人を出した炭じん爆発事故が起きた。その後、1970（昭和45）年度に最大出炭量657万トンを上げたが、1997（平成9）年3月に閉山した（大牟田市2008、大牟田市石炭産業科学館2016）。

三池炭鉱の所在地として表舞台にいた大牟田市が閉山後再び全国的に取り上げられ始めるのは、2005（平成17）年以降である。そのきっかけは、大牟田市における認知症の人を支える地域の取組みに関する番組が、NHKで放送されたことによる<sup>1)</sup>。それ以降、NHK番組では、大牟田市における認知症や高齢化に関する専門家や地域住民による取組みが取り上げられてきた。さらに直近では、大牟田市動物園の動物の高齢化への対応も放送された。

大牟田市と同じく旧産炭地に関するNHK番組を対象とした先行研究がある。まず、『番組が積み重なったアーカイブそのものを研究する』試みの入口に立つもの」と位置付けた水島らによる研究である（水島・西・桜井2011:39）<sup>2)</sup>。この中では、夕張に焦点をあて、番組群を「〈地域医療〉の系」と「〈炭坑〉の系」について論じ、地域の歴史と炭坑の歴史の不可分を指摘している（水島・西・桜井2011:47-50）。さらに、炭鉱関連のドキュメンタリー番組群、特に筑豊炭田に注目し、「記録」された炭鉱の「記憶」と映像アーカイブの可能性について論じている木村の研究もある<sup>3)</sup>。この中で、木村は筑豊と比較して三池の登場する番組の少なさを指摘している（木村2014:64）。

上述の先行研究を踏まえつつ、本研究<sup>4)</sup>では、三池炭鉱の所在地であった大牟田の地域研究の前提となる地域分析の一つとして、NHKという公共放送が、大牟田の何をどのように描いてきたかに焦点をあてる。その際、ドキュメンタリーや福祉番組の分析を通して、大牟田の歩みと三池炭鉱の歴史の交錯と地域の可能性についても検討していく。なお、本文中における年の記載は、西暦と元号を併記する。これは、大牟田市ウェブ公開の「大牟田の歴史」や市制100周年に基づく「市史編さん事業」の西暦と元号の併記に対応させるためである<sup>5)</sup>。ただし、本稿での文献・資料の出版年の表示に関しては、西暦を用いる。

## I. 研究目的と方法

### 1. 研究目的と意義

本研究の目的は、NHKアーカイブスにおけるドキュメンタリーや福祉番組の分析を通じて、大牟田という地域の歴史と三池炭鉱の歴史の交わりを読み、さらに地域の可能性や今後のまちづくりへの示唆を得ていくことにある。その際、次の内容に焦点をあてる；

- ・NHKは、大牟田の地、あるいは社会的背景や社会問題・課題の何に注目し、どのように描いてきたか。

- ・大牟田に生きる人々やその活動の何をどのように描いてきたのか。それらが果たした役割とは何か。
- ・地域の高齢化と住民たちの状況はどう表象されているのか。
- ・人々の語りや番組内容が示唆することと今後のまちづくりへ活かされるものは何か。

これら4点を踏まえたうえで、地域の表象に与える公共放送の影響についても言及する。

本研究の意義は、地域研究の基礎となる地域分析の一つとして、地域やそこで生きる人々への視点の変化をNHKという公共放送である第三者が描いた放送番組を通して把握することにある。なお、本稿はNHK番組アーカイブス学術利用トライアル（2017年度第2回）の枠内での調査結果の分析を中心とする。

## 2. 方法

### 1) 対象

本研究では、NHKで放映された三池炭鉱や大牟田市に関連するドキュメンタリー番組（福祉番組含む）を分析対象としている。

対象選定から視聴までの経過は以下のとおりである。

NHKデータベースでキーワードを用い、NHKテレビ放送開始の1953（昭和28）年から2016（平成28）年までの保存番組検索を行った。その際、コンテンツ抽出に用いたキーワードは次のものである；大牟田市、大牟田、三井三池炭鉱、三池炭鉱、三池、炭鉱、石炭政策、大谷るみ子、永田久美子、認知症。さらに、検索結果から、タイトルチェック、重複タイトルの削除（再放送がある場合は放送日が早いものを選択）、番組詳細のチェック、ドラマやニュースの削除を行って絞り込みをした。その結果、閲覧希望の25番組を選んだ。視聴開始後、内容補足のための追加申請を経て、最終的な閲覧数は27番組となった（表1参照）。

### 2) 調査期間と方法

番組閲覧は、NHK番組アーカイブス学術利用トライアルの閲覧スケジュールに基づき、2017（平成29）年6月から8月までの間に20回、NHK放送博物館の指定閲覧室で試用DVDを用いて行った。また、同時期にNHK放送博物館の一般公開ライブラリーでも閲覧可能な番組の視聴と番組説明文の確認を3回行った。番組映像や音声の外への持出しは完全に禁止されているので、閲覧時に必要事項を筆記した。

閲覧番組は内容からみると大きく2つのカテゴリーに分かれる。ひとつは三池炭鉱関連、もうひとつは認知症・高齢化関連である。それらを時代区分（昭和時代、平成時代）と合わせて見ることによって、番組内容から見た三池炭鉱と大牟田の変遷を整理・分析していく。

## II. 昭和時代（1960（昭和35）年～1989（昭和64）年）

本章でいう昭和時代とは、本研究関連放送番組の最初が1960（昭和35）年であることから、1960（昭和35）年から1989（昭和64）年までとする。

この時代においては、以下の6本の三池炭鉱関連の放送番組がある（【 】の数字は表1のID番号。以下、副題とID番号で番組を表記する。）。ただし、1974（昭和49）年以降の昭和

表1 視聴番組一覧

ID	放送年月日	番組名	副題
1	1960/05/08	日本の素顔	三池
2	1960/09/11	日本の素顔	黒い地帯～その後の炭鉱離職者達～
3	1961/12/17	日本の素顔	黒い墓標－石炭産業合理化の断面－
4	1963/12/21	現代の記録	この生命ある限り
5	1970/01/23	現代の映像	三池の10年
6	1993/04/10	ミニ番組	近代化遺産 「三池港」
7	1995/06/03	NHK スペシャル	戦後50年そのとき日本は 第3回「三池争議 激突『総資本』対『総労働』」
8	1996/01/29	ふるさと おもしろ博物館	世界が見えるカルタ博物館～福岡県大牟田市
9	1997/02/17	クローズアップ現代	ヤマが消える～三井三池炭鉱閉山～
10	1997/04/09	ETV 特集	三池炭鉱閉山第1回 忘れられた患者たち・三川鉱 CO 中毒患者長期追跡調査 -
11	1997/04/10	ETV 特集	三池炭鉱閉山第2回 長い坑道・元坑夫がかたる炭鉱史・
12	1997/07/20	新日本探訪	炭鉱は消えても～大牟田市・再出発の夏～
13	2000/12/03	NHK アーカイブス テレビの青春	ドキュメンタリー「空白の歳月」(1973年制作) 他
14	2002/03/05	ETV2002	シリーズ 日本を支えた黒ダイヤ第1回
15	2002/03/06	ETV2002	シリーズ 日本を支えた黒ダイヤ第2回
16	2005/08/31	福祉ネットワーク	「シリーズ 地域で考える認知症」－安心して出歩ける町を作るには－福岡県大牟田市のとりくみから～
17	2005/09/07	福祉ネットワーク	「シリーズ 地域で考える認知症」－子どもから意識が変わる～福岡県大牟田市のとりくみから～
18	2006/06/14	福祉ネットワーク	福岡発 地域で支える認知症～動き出したコーディネーター制度～
19	2008/05/16	難問解決! ご近所の底力	認知症
20	2008/11/18	プロフェッショナル 仕事の流儀	介護はファンタジー～認知症介護 大谷のみ子～
21	2011/09/08	福祉ネットワーク	シリーズ認知症と向き合う(4)「本人交流会の現場から」
22	2013/11/30	ETV 特集	三池を抱きしめる女たち～戦後最大の炭鉱事故から50年～
23	2014/05/27	視点・論点	認知症を考える(2) 安心して徘徊できる町
24	2015/06/14	認知症キャンペーン	広がる地域の集い 認知症カフェと交流会
25	2015/07/02	認知症キャンペーン	認知症のサポーターになろう
26	2015/07/19	認知症キャンペーン	もし町で出会ったら
27	2016/05/04	にっぽん紀行	“命の動物園”へようこそ～福岡 大牟田～

時代には、関連番組は見当たらない<sup>6)</sup>。

「日本の素顔<sup>7)</sup> 三池」(1960 (昭和 35) 年 5 月 8 日) 【1】

「日本の素顔 黒い地帯～その後の炭鉱離職者達～」(1960 (昭和 35) 年 9 月 11 日) 【2】

「日本の素顔 黒い墓標－石炭産業合理化の断面－」(1961 (昭和 36) 年 12 月 17 日) 【3】

「現代の記録 この生命ある限り」(1963 (昭和 38) 年 12 月 21 日) 【4】

「現代の映像 三池の 10 年」(1970 (昭和 45) 年 1 月 23 日) 【5】

「空白の歲月－三池 CO 患者の 10 年」(1973 (昭和 48) 年 11 月 9 日。「NHK アーカイブス テレビの青春」(2000 (平成 12) 年 12 月 3 日) 【13】 に収録)

これらは、三池争議<sup>8)</sup>と三池炭鉱爆発事故という 2 つの事項に分けられる。以下、その詳細を見ていく。

### 1. 三池争議関連

まず、三池争議関連の 4 本の時系列の関係は次のようになる<sup>9)</sup>：「三池」【1】の取材及び放送時は、1960 (昭和 35) 年 1 月 25 日からの会社側のロックアウト<sup>10)</sup> 継続や三池炭鉱労働組合 (以下「三池労組」という。) の無期限スト継続、三池労組と三池労組から分裂した三池炭鉱新労働組合 (以下「新労組」という。) の衝突、暴力団の介入による三池労組組合員刺殺という物々しい状況であった。同年 9 月 11 日放送の「黒い地帯～その後の炭鉱離職者達～」【2】の時期は、中央労働委員会<sup>11)</sup> (以下「中労委」という。) の斡旋案受諾の動きがあった。同年 11 月 1 日の三池労組の無期限スト解除と会社側のロックアウト解除による三池争議終了から 1 年余りたった時期に放送されたのが、「黒い墓標－石炭産業合理化の断面－」【3】であった。そして、三池争議後 10 年、1970 (昭和 45) 年 1 月 23 日に放送されたのが「三池の 10 年」【5】である。

それでは、各番組にまちや人々の状況がどのように描かれているであろうか。

「三池」【1】では、連日ものものしい空気に包まれた貯炭槽付近の三池労組と会社側の攻防、スクラムを組んだデモや街宣車、三池労組と新労組の乱闘や家族も含んだ対立、商店や商工会の動き、街角に立つ警察官といった映像が流される。それに加えて、ナレーションでは、「争議が大牟田の経済に与えた打撃は深刻ですが、また同時に今度のストライキはこの街を 2 つに引き裂きました。(中略) 他の市民たちは、この騒ぎに巻き込まれるのを恐れて争議については口をつぐんでいます。」という内容が語られる。また、三池労組の団結力を支えた理由の 1 つとして、物事の決定過程における次の方法があったことをナレーションで示している：あらゆる事柄について一般組合員たち 6 人程度の小グループ討議で徹底的に発言し合い、その結果を各々責任者が持ち寄り、それを上部組織がまとめて決定し、その決定には皆が従う。なお、映像では、割烹着に鉢巻き姿の三池炭鉱主婦会メンバーが社宅の炭鉱住宅そばの広場に走って集まり、いくつもの小グループに分かれて熱心に討議する状況も描かれている。

この番組の制作者である小倉一郎の意図を桜井は、「三池争議は、総資本対総労働の激突という抜き差しならない構図を大牟田の街に出現させた。(中略) 小倉は、この大争議を、戦後に持ち越された“戦争”ととらえた。」と指摘している (桜井・東野 2012: 11)。そのうえで、労働組合の分裂や同じヤマの仲間同士の乱闘を含むこの争いを子どもたちが見ていることへの

気づきが小倉にあったという（桜井・東野 2012；11）。

続いて、1960（昭和 35）年 9 月放送の「黒い地帯～その後の炭鉱離職者達～」【2】と 1961（昭和 36）年 12 月放送の「黒い墓標－石炭産業合理化の断面－」【3】では、炭鉱離職者の離職後の生活や失業による生活の貧しさという当時の日本の社会問題を取り扱っている。前者は、幹旋案受諾時期の放送であるが、三池争議の終結後、多くの炭鉱離職者がでる問題を考える手がかりとして、今までの炭鉱離職者の離職後の生活を取りあげるといふ番組趣旨であった。この中では、他地域の炭鉱離職者や失業者が多く登場する。彼らの状況も三池争議も根が同じところ（危機に立つ石炭産業とその合理化に絡む人員整理）にあることが指摘されていた。さらに、後者の番組においては、ナレーションで、三池争議最大激戦地の貯炭槽の横に新しい巨大選炭機が建設されつつあること、これが合理化に対応した新しい設備投資の代表的な姿であることが説明された。加えて、「三池の場合、会社の合理化の意図は一応成功しつつあると言えます。」「あれほどの大争議を経験しながら、豊富な石炭の層を持っている三池は、合理化政策を乗り越えて、再び立ち上がりつつあります。」というナレーションもあった。つまり、この 2 本の番組を通して「合理化」という言葉が繰り返される。

最後に、1970（昭和 45）年 1 月 23 日放送の「三池の 10 年」【5】。番組開始部分で、1970（昭和 45）年 1 月 1 日の三池炭鉱三川鉱の朝、続いて三池争議の闘い場面が現れる。それらの場面に次の説明がある；三池争議が総資本対総労働といわれる大争議だったこと、経済の高度経済成長政策が石炭産業の合理化（人員整理、スクラップ・アンド・ビルド<sup>12)</sup>）に始まったこと、その矢面に立ったのが三池労組だったこと。さらに、三池労組 10 年の歴史を追う中で、三池労組と新労組の組合員数の増減<sup>13)</sup>、両組合員<sup>14)</sup>（三池労組に関しては家族ぐるみ）や大牟田から遠隔地に移った炭鉱離職者の生活状況や思い、組合運動方針などが、組合幹部や指導者、両組合員のインタビューを通して明らかにされる。その際、次節で詳細に触れる、炭じん爆発事故（1963（昭和 38）年）についても、爆発時の遠景、社葬、入院中の重度の一酸化炭素（以下、「CO」という。）中毒患者の映像が流される。

以上の 4 本の番組内容から、三池争議に関しては、総資本対総労働の対立、三池労組と新労組の分裂、組織の団結と人間関係の分断、石炭政策と合理化、高度経済成長といったキーワードが浮かびあがってくる。

## 2. 三池炭鉱爆発事故関連

本節では、1963（昭和 38）年 11 月 9 日に発生した三池炭鉱三川鉱<sup>15)</sup>での坑内炭じん爆発事故に関する 2 本の番組を取り上げる。なお、この戦後最大の爆発事故の人的被害は、死者 458 人、CO 中毒患者 839 人にのぼった。

1963（昭和 38）年 12 月 21 日に放映された「この生命ある限り」【4】は、三川鉱爆発事故の 2 人の重症患者の事故後 1 か月に及ぶ臨床記録を紹介し、一酸化炭素の恐ろしさを明らかにすることが番組趣旨とされている<sup>16)</sup>。1 人目の患者に関しては、熊本大学附属病院精神神経科の医師による診察、病床での本人や付き添う家族の状況が映し出された。この記録の最後には、患者が一応危険な状態を脱したと「命ある限り頭脳の回復もまた期待できる」というナレー

ションが流れた。また、2人目の患者に関しては、大牟田市内精神神経科病院での本人の回復過程と家族（付き添う母子や留守宅の子供たち）の状況が映像で示される。番組最後のナレーションでは、これほど多くの患者が一度に出たことは世界にも例がなく、わずかな臨床例では完治した場合も後遺症を残す場合もあり、どこまで回復するかはわからないことが述べられた。

この事故からの10年間の本人及び家族の状況を空白の歳月として描いているのが次の番組である：「空白の歳月－三池CO患者の10年－」（1973（昭和48）年11月9日放送）。この中で、命はとりとめたものの頭痛や手足のしびれ、人格変化等のCO中毒後遺症を抱えた患者たちの入院中の様子（最重度患者のベッドでの状況、機能回復訓練を行う患者たち）や、労働省から治癒認定を受けた患者のための職場（作業所）での作業風景、及び家族とのやりとりが映し出される。患者本人だけではなく、家族たちへのインタビューもあり、それと共にナレーションも入る。これら音声によって、家族関係の変化、家族の戸惑い・苦しみ・怒り・悲しみ、生活状況の苦しさが語られる。この番組は、2000（平成12）年12月3日放送の「NHKアーカイブス テレビの青春」【13】の収録番組でもある。ここでは、1973年の番組に登場した患者や家族の2000（平成12）年時点での状況、事故を巡る裁判、事故後34年目にあたる1996（平成8）年のCO中毒後遺症一斉検診、1997（平成9）年三池炭鉱閉山について、ナビゲーター役のアナウンサーによる語りがあり、「およそ250の方が、今も後遺症と闘っています。」と締めくくられる。

この大事故に対する大牟田の街の状況は両番組には出てこない。しかし、事故からひと月後の『大牟田市政だより』の市長（事故当時）のステートメントに次の箇所がある：「いまや、わが大牟田は、あらゆる意味で、未曾有の一大難関に直面するに至りましたが、これらを突破するためには、市民全体の忍耐と協力と勇気が必要であります。そして、今後保安の確保と人命の尊重が、何ものにも優先せられ再びかかる災害が、起らないように、全産業関係者の自省を心から望む次第であります。」（大牟田市 1963）。ここでは、人命尊重の強調や未曾有の一大難関の直面状態とその突破への市民全体の在り方が述べられている。しかし、多くの関係者は、これが引き起こした結果や影響の大きさを当時予想していなかったと考えられる。

### Ⅲ. 平成時代（1989（平成元）～2016（平成28）年）

1990年代に入ると再度、三池炭鉱関連、特に三池争議と三池炭鉱爆発事故に関連する番組が登場する。2005（平成16）年からは、認知症や高齢化に関する番組が大牟田での取組みとして前面にでてくる。そこで、この時代の内容を大きく、三池炭鉱関連と認知症・高齢化の2つのカテゴリーに分けてみていく。なお、三池炭鉱は、1997（平成9）年3月30日に閉山した。この三池炭鉱閉山は大牟田市にとっても大きな出来事であった。そこで、閉山前後で区分して述べていく。

#### 1. 三池炭鉱関連

##### 1) 閉山前

閉山前には、三池争議、文化、三池炭鉱閉山の3種類の番組がある。

まず、三池争議に関しては、1995（平成7）年6月3日に放送された「戦後50年 そのと

き日本は第3回」で「三池争議 激突『総資本』対『総労働』」【7】という特別番組がある。番組冒頭で、キャスターは、三池争議が、戦後50年の間に日本の針路を決定するような重要な選択のひとつであったことを指摘した。そして、この争議が、総資本対総労働の対決といわれたのは、これが体制変革の突破口になるかもしれないと労使双方が力を尽くして激突したためという。言い換えると、これは一企業紛争ではなく、企業・財界と労働側が死力を尽くして激突し、体制存続の危機回避のために時の総理大臣自らが介入していった争議であった（NHK取材班1995：206）。この番組は、当時の関係者の証言を中心においたものであった。この取材から帰ってくるたびにスタッフから、「君たち若い世代は、物は豊かな時代を生きているが、われわれのように時代と向き合い、闘い、仲間と手を取って一丸となって目標に前進したことがあるのかと問われているようだ」と、同じ言葉が出たという（NHK取材班1995：208）。

次に、文化に関しては、「近代化遺産『三池港』」（1993（平成5）年4月10日放送）【6】と「世界が見えるカルタ博物館～福岡県大牟田市」（1996（平成8）年1月29日放送）【8】の2番組がある。前者では、三池炭鉱で採掘した石炭を大きな船で搬出するために1903年に完成した三池港、港周辺に残る情景や三井倶楽部などが映像として映し出される。これは、2015（平成27）年7月認定のユネスコ世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」と関連してくる。後者では、1991（平成3）年4月、大牟田市による日本の「カルタ発祥の地」宣言や三池カルタ記念館「カルタックスおおむた」<sup>17</sup>開館などをアナウンサーがレポートした。この番組始めに「福岡県大牟田市、かつては三池炭鉱がこのまちの顔でしたが、石炭産業が衰退してしまった今、新しいまちのイメージを探しています。そのひとつがカルタなのです。」というまちの状況と新しいまちづくりへの模索が示された。

最後に、三池炭鉱閉山の方針を会社側が組合に申し入れた日の番組、1997（平成9）年2月17日「ヤマが消える～三井三池炭鉱閉山～」【9】。この当時、国内で操業を続けている炭鉱は三池炭鉱を含めて3つしかなかった。しかし、累積赤字が730億円まで膨らみ、会社側は1997（平成9）年3月30日で閉山にすることに踏み切った。番組の中では、明治時代の富国強兵策、戦後の復興と三池炭鉱の108年の歴史が近代日本の産業史に重なることの説明が映像と共に流れる。そこには、戦後の石炭生産最優先の経済政策により炭鉱の城下町として大きく成長する大牟田市、21万人近くまでなった人口、にぎわう市場の情景と共に「三池はまさに栄光の時代を歩んでいた」という語りもある。それ以降の次のような時代の移り変わりも映像と語りで示される；石炭から石油へのエネルギー革命が進む中で石炭産業が構造的な不況業種になり、合理化が推進され、三池争議や三川炭鉱じん爆発事故を経た後も石炭産業の斜陽化が進んだこと。続いて、次の点が大牟田市から実況中継された；石炭産業に直接かかわっていない市民も状況に関心を持っていること、寂しいという声が多く聞かれたこと、来るべき時が来たと受け止めている人が多いこと。そのうえで、閉山に伴う離職者の再就職について、次の点も報告された；三池炭鉱従業員1,200人（平均年齢48歳、地元での再就職希望者90%以上）の解雇と会社側準備1,700人分の再就職先のマッチングの問題、下請けや関連企業への影響（廃業や1,000人超の失業見込み）、少ない誘致企業数（2社）。加えて、閉山前に会社の斡旋で東北地方の鉱山に単身赴任で再就職した6名（平均年齢45歳）の状況取材と閉山後地元から離れる人の試算



数（7,800人）の紹介、炭鉱で生きてきたまちの新たな活路の見出しに対する地元の不安の広がり、指摘もあった。これらを受けて、番組後半では、海外の安い石炭におされて国際競争力を失っている石炭産業の構造調整の厳しさがキャスターとゲストの間で話し合われた。ゲストからは、国際化の進行に伴い日本の資源や社会条件で対応できない産業の転換の新しいパターンを創る重要性の指摘があった。この番組では、三池炭鉱が石炭産業の象徴として描かれていた。

日本における最後の炭鉱、北海道釧路市の太平洋炭礦は、2002（平成14）年1月30日に閉山した。そのすぐ後、3月5日と6日に放送された「シリーズ日本を支えた黒ダイヤ第1回」【14】と「第2回」【15】で、石炭政策100年の歴史の振り返りが行われた。そのナレーションには、石炭から石油へのエネルギー革命の波が各地の炭鉱を直撃する中で起きた三池争議が会社側の合理化を認める形で決着以降、全国の炭鉱で人員削減が推し進められたことも含まれていた。つまり、石炭政策史、あるいはエネルギー政策史において、三池争議は石炭産業の合理化推進の分岐点の象徴といえる。

## 2) 閉山後

閉山後に関しては、市民の生活と昭和時代の三池炭鉱での出来事に関する2つのグループに分けることができる。

まず、閉山後の市民の生活状況ということでは、1997（平成9）年7月20日放送「炭鉱は消えても～大牟田市・再出発の夏～」【12】がある。番組冒頭では、閉山によって炭鉱や下請け企業で1,400人余りが職を失ったこと、番組最後では、閉山から間もなく4か月の時点で離職者の1割しか仕事が決まっていなかったことが語られる。番組内では、公共職業安定所の炭鉱離職者就職相談会、限られた大牟田周辺の再就職先や平均年齢48歳の元炭鉱マンたち、雇用促進事業団相談員の家庭訪問による再就職斡旋、大牟田市内炭鉱住宅に住む1,000世帯の来年の秋までの立ち退き、石炭産業衰退の中で活気を失っていた商店街への追い打ち、再就職者と家族の状況や思い、市民の様子などが映像、インタビュー、ナレーションで示される。

次に、昭和時代の三池炭鉱爆発事故によるCO中毒患者とその家族に関する番組が閉山直後に2本、それから16年後に1本ある。閉山直後の2本とは、「三池炭鉱閉山第1回 忘れられた患者たち－三川鉱CO中毒患者長期追跡調査－」（1997（平成9）年4月9日）【10】、「三池炭鉱閉山第2回 長い坑道－元坑夫がかたる炭鉱史－」（1997（平成9）年4月10日）【11】である。ここでは、1本目の番組に着目する。番組では、事故から34年目に大牟田市で行なわれた熊本大学医学部精神神経科OBの医師たち（34年前CO中毒患者を診察した同じメンバー）によるCO中毒患者一斉検診の内容や映像が流れた（映像には、55～85歳の患者が登場）。その中には、中毒症状に苦しむ炭鉱労働者たちの25年に渡る長期追跡調査を独自に行ってきた医師もいた。この医師は、一斉検診終了後、次のような思いを語る；事故時のガス吸引による人生の急変状況の中で一生懸命頑張ってきた患者たちの姿への感動とかつて追跡した人の3割近くが亡くなっている残念さ。また、患者の中にはインタビューで、「何といても人の命を考えてもらいたい」とこととこれを後世に伝える企業側の努力への要望を述べる者もいた。番組最後では一斉検診中間報告書に基づき、受診者156名の統計データとCO中毒後遺症と加

年齢が相乗的に作用した症状の悪化が示された。このため、炭鉱が残したものの考証という番組意図のまとめがここに集約されてしまった。加えて、番組後半部で、在宅患者の介護を続けたのは妻たちであったことの語りがあるが、内容的な説明はほぼない。ただし、これについては事故後50年に放送された以下の番組で詳細に取り上げられている。

2013（平成25）年11月30日放送の「三池を抱きしめる女たち～戦後最大の炭鉱事故から50年～」【22】では、事故から50年、今もCO中毒に苦しむ人達がいる事実が伝えられる。それと同時に、病気を抱えた夫を支えて生きる中で、夫の現実や炭鉱事故と向き合ってきた妻たちの半世紀が語られる。例えば、事故当日の状況、事故後の夫の変化、家族会のこと、CO中毒患者救済を訴えた家族（女性75名）による144時間坑内座り込み、裁判を巡る状況、子育て。さらに、ある夫婦は取材時に事故後50年にしての思いを聞かれ、夫は50年も生きてきたことや長い時間を失ったことをしみじみと語り、そばの妻は、できないことは助け合っていこうとの声を夫にかけながら自分もかみしめていた。加えて、今までの番組との大きな違いは、当事者や医師の子供の登場と事故後50年式典（大牟田市等主催）の三川鉱跡での実施である。事故後40年に渡り患者の診察を続け、上述の一斉検診にも参加した医師であった父の遺志を娘が継ぎ、事故直後多くの患者が運び込まれた病院での診察や家庭訪問を現在も行っている。その映像と共に思いも語られる。式典に関しては、遺族やかつての炭鉱仲間、市民など約450人の参加があった。つまり、次世代や公的機関が新たに役割を担ってきている。

以上から、閉山直後の番組と比較すると、閉山から10年以上たった番組の方が負のイメージが少なくなっている、といえる。この点については、次章で考察する。

## 2. 認知症・高齢化（2005（平成17）年～2016（平成28）年）

公的介護保険が施行された2000（平成12）年4月、認知症対策が強化された改正介護保険法が動き出した2006（平成18）年4月。この間に、NHKの福祉番組で取り上げられたことから、大牟田市における認知症に関する取り組みが全国的に有名になった。

2005（平成17）～2011（平成23）年までの「福祉ネットワーク」では大牟田の取り組みが4本ある。

- ・2005（平成17）年8月31日「『シリーズ 地域で考える認知症』－安心して出歩ける町を作るには－～福岡県大牟田市のとりくみから～」【16】
- ・2005（平成17）年9月7日「『シリーズ 地域で考える認知症』－子どもから意識が変わる～福岡県大牟田市のとりくみから～」【17】
- ・2006（平成18）年6月14日「『福岡発 地域で支える認知症～動き出したコーディネーター制度～』」【18】
- ・2011（平成23）年9月8日「シリーズ認知症と向き合う（4）『本人交流会の現場から』」【21】

1本目は、徘徊でいなくなったお年寄りを捜す模擬訓練という「はやめ南」地区の地域住民たちの取り組みから認知症の人や家族が安心して暮らせるために何ができるのかを考えようとした番組である。2本目には、子どもから意識が変われば、大人も変わるという考えのもと、認知症の人の心の世界を描いた絵本を市内の小中学校で授業に使い、認知症理解促進を図って

いる取組みである。両番組において、大牟田の取組みを「ユニークな取組み」と位置づけている。3本目に関しては、大牟田市の認知症ケアの専門家がスタジオゲストの上で、2006年4月介護保険制度改正による認知症対策強化に先駆けた福岡県大牟田市での「認知症コーディネーター」（認知症介護の専門家）の育成が紹介される。4本目は、大牟田市の認知症の「本人同士の交流会」の取組みを取り上げている。認知症の当事者が、仲間と語り、分かち合うことで生きる意欲を取り戻す姿とともにそれをサポートする専門職の関わり方（当事者の思いのキャッチや当事者同士の協力活動できる場の創出）が描かれている。

これら福祉ネットワークの最初に放映された地域住民の活動は、次の番組でも取り上げられた：「認知症」（2008（平成20）年5月16日）【19】。認知症で徘徊したお年寄りが事故に会うことが全国的に相次ぐ中での認知症の徘徊を地域で支える妙案として、福岡県大牟田市から商店やタクシー運転手など2000人が参加した活動が紹介される。そして、大牟田市のはやめ南人情ネットワークの2人がゲストとして登場し、自分たちのスローガン「1人の100歩より100人の1歩」のもとでの協力体制について自信をもって誇らし気に語る。また、同年には、大牟田市における認知症介護のリーダーである大谷るみ子が「プロフェッショナル 仕事の流儀」【20】に登場し、地域や人（利用者、スタッフ）と向き合う姿が映しだされる。

大谷は、2014年の「視点・論点」（【23】）、2015年の「認知症キャンペーン」（6月14日【24】、7月2日【25】、7月19日【26】）にも登場し、以下の3本の番組で大牟田市の取組みを中心に話をした。特に1番目の番組では、既述した2005（平成17）～2006（平成18）年までの「福祉ネットワーク」3本の背景も含めて語られている。

- ・「認知症を考える（2）安心して徘徊できる町」（2014（平成26）年5月27日）【23】
- ・「認知症のサポーターになろう」（2015（平成27）年7月2日）【25】
- ・「もし町で出会ったら」（2015（平成27）年7月19日）【26】

上記1番目の番組においては、全国の認知症の地域づくりのモデルになっている大牟田市（放送時の人口は約12万人、高齢化率は32.4%）の例を紹介しながら、認知症高齢者を地域で支える視点の重要性を指摘している。その際、2002（平成14）年に、大牟田市で認知症の取組み「地域認知症ケアコミュニティ推進事業」が開始され、その目的が「地域全体で認知症の理解を深め、認知症になっても誰もが安心して暮らし続けるまちをつくろう」というまちづくりであったことを明かす。そして、最初に市内全世帯の実態調査を実施し、そこには市民からの約1,500の自由意見が寄せられ、それがその後の認知症対策を方向づけたという。その市民の声をまとめたのが「地域づくりの提言」という次の3項目である。

- ・「向こう三軒両隣、隣組、小学校区単位の身近なネットワークの構築」
- ・「認知症を隠さず、恥じず、見守り、支える地域全体の意識向上」
- ・「認知症ケアと地域づくりの要となる推進者の育成」

1番目は、「はやめ南人情ネットワーク」という住民活動と徘徊模擬訓練につながり、2010（平成22）年には全校区に広がった。2番目は、子どもの時から学ぶことが大事という多くの声に答え、2004（平成16）年の認知症啓発の絵本作り、小中学校の出前教室（この10年で約6千人の子どもたち）を行い、認知症の人を支える地域の大切さを学ぶ機会を提供することに発展

した。3番目は、2003（平成15）年から始めた認知症コーディネーター育成につながった。これらはすべて、大牟田の認知症の人を支える地域づくり、まちづくりの要であり、これからも行政がしっかりビジョンを持ち、ネットワークを発展させることを望む旨が大谷によって述べられた。市民からの約1,500もの自由意見が寄せられたことやそれを大事に活かしたことも重要な出発点であったのではないだろうか。言い換えると、市民の声に耳を傾け活かしたことこそが行政や関わった専門家の賢明さだった。

なお、「認知症のサポーターになろう」【25】では認知症の絵本教室、「もし町で出会ったら」【26】では見守り声かけ模擬訓練（2015（平成27）年から徘徊という言葉を使わない）や見守り声かけが当たり前前のまちづくりについて、大谷は説明した。

最後に挙げる番組「命の動物園へようこそ～福岡 大牟田～」(2016(平成28)年5月4日放送)【27】では、開園75周年を迎える大牟田市動物園が舞台である。日本最高齢のペリカン、寝たきりのカンガルーなど高齢化率が30%超の状態である。人気者のゾウやトラが次々と亡くなっても、市から委託された民間会社では補充する財源がない。そういった中で、動物のありのままの姿を見せる新たな挑戦が始まった。高齢のため足腰が弱り、うまく歩けなくなった姿や動物の特徴を活かしたりハビリ訓練の模様、長生きのための健康診断の様子などを公開している。番組では、高齢の動物が伝える“命”の重みだけではなく、それを支える動物園スタッフから子どもグループや親子連れ、高齢動物に自分を重ねる高齢者といった来園者まで様々な人の思いが映像と音声（言葉）で伝えられる。本稿最初に、2017（平成29）年9月1日現在、大牟田市の高齢化率が35.3%であることを記述した。この動物園での取り組みを見ると高齢化が人間のみならず動物にも現れていること、地域での共生は人間同士だけではないことを改めて認識させられる。

#### IV. 考察

本章では、第2章と第3章を踏まえ、以下の2点に絞って考察する。

##### 1. 昭和時代と平成時代の比較

昭和時代は、三池炭鉱に関する内容が主であり、その背景に大牟田のまちや人が描かれる場合があった。三池争議に関しては労働組合や会社側、三池炭鉱三川鉱爆発事故に関しては診察する医師以外は三池炭鉱の労働者であるCO中毒患者とその家族というように、主な登場人物はすべて三池炭鉱関係者である。イメージとしては、三池争議では、総資本対総労働の対立、組合間の分裂や人間関係の分断、組合の団結が挙げられる。言い換えると、「対立・分裂・分断」と「団結・規律」という対比もできる。爆発事故に関しては、生死、CO中毒患者、後遺症、家族の悲しみや苦しさ、生活状況の苦しさ、命などが特に映像やナレーションを通したイメージといえる。

平成時代に入ると、大牟田の新しいまちのイメージ探し、三池炭鉱の閉山、全国的に有名になった認知症に関する取り組みといった内容が盛り込まれてくる。閉山時には、離職、失業、再就職と三池炭鉱というまちのシンボルの喪失といった内容が映像やナレーション・インタビューの音声で伝えられた。それに対して、2005（平成17）年以降の番組では、高齢化率の高

さや人口の減少は他の地域の10年先を行っていても、地域のネットワークを用いて、認知症のある人が安心して出歩けるまちづくり推進が登場している。当初は、ユニークな取組みと放送内では紹介されていたが、やがて「認知症の地域づくりのモデル」と言われるように変化してきた。

なお、三池炭鉱に関しては石炭政策、エネルギー政策の枠内、或いは石炭産業で話題になってきた。それに対して、特に直近10年、大牟田市での認知症に関する取組みは高齢者政策あるいは高齢者福祉や保健医療、介護といった分野での脚光をあびてきたといえる。

## 2. 価値の転換

第3章で既述した炭鉱閉山前後の番組では、三池争議や炭じん爆発事故関連とともに地元経済や離職者対応の厳しさが映し出されていた。また、まちづくりへの新しいイメージの模索もあった。この閉山後、前大牟田市長の古賀は、「三池炭鉱が閉山して地域社会が意気消沈し、マスコミなどで盛んに大牟田市のマイナスイメージを発散していた」影響が子どもたちに伝わっていないか心配したという（古賀2016:207）。

さらに、1998（平成10）年10月に大牟田市で開催された「歴史を生かしたまちづくり」シンポジウムでパネリストの熊谷は、三池には負の遺産が多すぎる、閉山ですべてを忘れて次へ行った方が良いのではないか、という会場からの「負の遺産」という言葉に動揺したという（熊谷2012:46-47）。これ以後、大牟田市は「こえの博物館」事業（2001（平成13）～2002（平成14）年度）に熊谷と共に取り組んだ。これは、大牟田のまちが、これまで積み重ねてきた石炭産業の歴史（近代化遺産施設と炭鉱に関わった人々の証言をもとに）を映像記録として後世に伝えようとする試みであった（大牟田市石炭産業科学館2017）。また、熊谷はその後、大牟田のまちの再生の作品や「三池を抱きしめる女たち～戦後最大の炭鉱事故から50年～」【22】を送り出した。これらの活動は、石炭に携わった人々の築いた歴史が大切な遺産であるという価値へとつながっている。

今回視聴した番組には、重い過去のものもあったが、この土地で精一杯生きている人たちがいて、自分の状況や直面している問題と向き合って生きていたことが描かれている場面も多くあった。また、高齢化率が高いということマイナスに捉えるのではなく、高齢者自らが地域に出て、「1人の100歩より100人の1歩」と見守り声かけが当たり前まちづくりに積極的に参加している状況もあった。映像が語るイメージは地域内外の人々に伝わり、影響が強い。だからこそ、地域に対する第三者の視点で、その地域や取組みの正負両面を見極め、地域にも、全国的にも投げかけられる公共放送としてのNHK番組制作を期待する。

## 謝辞

本稿は「NHK番組アーカイブス学術利用トライアル(2017年度第2回)」の成果の一部である。本研究実施の機会の付与と実施に伴う支援に感謝する。

## 注

- 1) 2009年4月の第32回北海道自治研集会分科会「地域からつくる保健福祉のしくみ」での報告で、はやめ南校区での徘徊模擬訓練について次のように述べられている。「2005年2回目の時（引用者註：2005年7月実施の第2回目徘徊模擬訓練のこと）、NHKがTV収録をして特番で全国放送したことから知られるようになった。」（小野晃とはやめ南人情ネットワーク世話人会（2009）「やさしいまちづくりは"向こう三軒両隣大作戦"でいこう！」自治労『第32回地方自治研究全国集会レポート・報告書集』（[http://www.jichiro.gr.jp/jichiken\\_kako/report/](http://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/) 2017年10月16日検索））。
- 2) アーカイブ（archive）とは、公文書や公文書保管所のことをいう。また、NHK アーカイブスとは、「ラジオ放送開始からおよそ90年、テレビ放送開始から60年余りの間に作られた番組や台本、番組にかかわる記録、番組を作るための素材、さらにデータベースなどその保管の仕組みや埼玉県川口市にある保管施設などを総称」のことをいう（<http://www.nhk.or.jp/archives/about/> 2017年10月17日検索）。
- 3) 「炭坑」とは石炭を掘る穴・坑道のことであり、「炭鉱」とは石炭を掘り出す鉱山のことをいう。
- 4) 本研究とは、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル 2017年度第2回に採択された「NHK アーカイブスからみた旧産炭地の状況と変遷－福岡県大牟田市を事例に－」を示す。
- 5) 大牟田市ホームページ（<http://www.city.omuta.lg.jp>）には、大牟田の歴史や市史編さんに関することが載っている。現在、市制100周年記念事業の一環として、昭和後期から平成にかけての市史編纂や現行の市史の見直し作業を含む「市史編さん事業」が実施されている。
- 6) NHK ラジオ第1では、1984年10月28日にラジオドキュメンタリー「地底の32時間」が三井三池有明鉱の坑内火災からの生還の記録として放送されている。
- 7) 東野によると、「日本初のテレビ・ドキュメンタリーは、NHK 総合テレビで放送された『日本の素顔』（1957～64）である。」（桜井・東野 2012：2）。
- 8) 三池争議の期間を大牟田市とは違い、次のように、1959（昭和34）～1960（昭和35）年としている場合もある；三池争議とは、「昭和34年（1959）から翌年にかけて、三井鉱山三池鉱業所の大量人員整理に反対して展開された労働争議。会社側の大量指名解雇に対し、組合側は全面ストで対抗したが、中労委の斡旋により会社案をのむ形で終結した。」（デジタル大辞泉 2017）。
- 9) コンパクトにまとめられた三池争議関連年表が以下の文献に掲載されている；NHK取材班（1995）『NHK スペシャル戦後50年その時日本は』第2巻、日本放送出版協会、210-211。
- 10) ロックアウトとは、「労働争議で、雇用者側が労働者の争議行為に対抗するために、工場などを一時閉鎖して労働者を閉め出すこと」をいう（デジタル大辞泉 2017）。
- 11) 厚生労働省（当時は労働省）の外局のひとつで、労働争議の斡旋、仲介、調停にあたる。
- 12) スクラップ・アンド・ビルドとは、「老朽化したり陳腐化したりして物理的または機能的

に古くなった設備を廃棄し、高能率の新鋭設備に置き換えること。」をいう（デジタル大辞泉 2017）。

- 13) 番組の中では両組合の組合員数について次のような説明がある；三池労組は、1960（昭和 35）年、争議開始時には組合員 12,800 人、組合分裂時 9,700 人、1970（昭和 45）年現在 1,754 人。新労組は、1966（昭和 41）年組合員 7,800 人まで増えたが、「合理化に伴って、この 4 年間に 1,500 人減った」。
- 14) 両組合員の一部のインタビューの映像（例：ヘルメットの違い）と語られる内容から所属組合の推測はつくが画面に文字表示はない。
- 15) 「三川鉦」と「三川坑」の両方の表現が使われるが、本稿においては、大牟田市が行政文書で用いている「三川鉦」と表示する。
- 16) NHK データーベースの番組内容には、「三池炭鉦の爆発事故の二人の重症患者の臨床記録を紹介し、一酸化炭素の恐ろしさを明らかにする。」と書かれている（<https://www.nhk.or.jp/archives/document/index2.html> より 2017 年 10 月 31 日最終検索）。
- 17) 現在の名称は「大牟田市立 三池カルタ・歴史資料館」（愛称：「カルタックスおおむた」）という。これは、日本のカルタ発祥の地を記念して建てられた大牟田市立三池カルタ記念館と郷土の歴史を伝えてきた大牟田市歴史資料館が 2006（平成 18）年 4 月 1 日に統合した文化施設である（大牟田市 2017b）。

## 文献・資料一覧

---

- ・木村至聖（2014）「『記録』された炭鉦の『記憶』と映像アーカイブの可能性－筑豊炭田の事例を中心に－」『ソシオロジ』59（1），57－73.
- ・古賀道雄（2016）『財政再建から市民協働のまちへ』海鳥社.
- ・熊谷博子（2012）『むかし原発 いま炭鉦』中央公論新社.
- ・松村明監修（2017）『デジタル大辞泉』小学館.
- ・水島久光・西兼志・桜井均（2011）「NHK アーカイブスの構成に関する研究（前編）」『放送研究と調査』2011 年 4 月，38-57.
- ・NHK 取材班（1995）『NHK スペシャル戦後 50 年その時日本は 第 2 巻』日本放送出版協会.
- ・大牟田市（1963）『大牟田市政だより』No.110（昭和 38 年 12 月 10 日）.
- ・大牟田市（2008）「大牟田のあゆみ（昭和時代）」（[http://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c\\_id=5&id=4401&class\\_set\\_id=1&class\\_id=377](http://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=4401&class_set_id=1&class_id=377) 2017 年 10 月 21 日検索）.
- ・大牟田市（2017a）「大牟田市の高齢化統計（平成 29 年 9 月 1 日現在）」（[https://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c\\_id=5&id=4010&class\\_set\\_id=1&class\\_id=210](https://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=4010&class_set_id=1&class_id=210) 2017 年 10 月 16 日検索）.
- ・大牟田市（2017b）「大牟田市立三池カルタ・歴史資料館」（[http://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c\\_id=5&id=2802&class\\_set\\_id=1&class\\_id=804](http://www.city.omuta.lg.jp/hpKiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=2802&class_set_id=1&class_id=804) 2017 年 10 月 30 日検索）.
- ・大牟田市石炭産業科学館（2016）「三池炭鉦の歩み」『大牟田市石炭産業科学館』（リーフレット）.

- ・大牟田市石炭産業科学館（2017）「こえの博物館」（<http://www.sekitan-omuta.jp/koe/index.html> 2017年10月31日検索）。
- ・小野晃とはやめ南人情ネットワーク世話人会（2009）「やさしいまちづくりは"向こう三軒両隣大作戦"でいこう！」自治労『第32回地方自治研究全国集会レポート・報告書集』（[http://www.jichiro.gr.jp/jichiken\\_kako/report/](http://www.jichiro.gr.jp/jichiken_kako/report/) 2017年10月16日検索）。
- ・桜井均・東野真（2012）「制作者研究〈テレビ・ドキュメンタリーを創った人々〉【第1回】小倉一郎（NHK）－映像と音で証拠立てる－」『放送研究と調査』2012年2月号，2-21.